

ちゆうしゆうつき
中秋月を望む（王建）

中庭地白樹栖鴉 冷露無聲濕桂花
今夜月明人盡望 不知秋思在誰家

ちゆうてい ち しろくして 樹に 鴉 栖む

解説 八月十五夜に月を眺めて郎中（昔の官職名。皇帝の護衛）のだれかに贈った詩である。

れいろ 声 無く 桂花を 湿す

語釈 ※栖＝すむ棲と同じ。※冷露＝冷やかな露。※桂花＝木犀の花。月の世界に桂の木が生えているという伝説があるので、月の縁語となっている。※秋思＝秋のものおもい。

こんや 月明 人 尽く 望む

通釈 中庭の地面は月光を受けて白く、樹上では鳥がねぐらにっいている。冷やかな露がいつか結んで、木犀の花をうるおしている。今夜の中秋の明月の光を、人は誰しも眺めているだろうが、その中でも、秋の物思いにふける人は誰だろうか。

しらず 秋思の 誰が 家にか 在るを